

人類館事件と差別の序列

第五回内国勸業博覧会における人間展示

筑波大学教授 千本 秀樹

- 1 第五回内国勸業博覧会
- 2 中国・朝鮮からの抗議
- 3 沖縄からの反発
- 4 太田朝敷の同化論
- 5 「一等国」＝差別国家への道

一九〇三年三月から七月末日まで大阪市天王寺公園周辺で、第五回内国勸業博覧会が開催された。民間企画である「学術人類館」で、沖縄やアイヌをはじめ、アジアの生きた人々が「展示」され、差別的な好奇の目にさらされた。沖縄やアイヌの歴史に関心を持つ人々には周知のことであるが、意外と知られていない。本稿では、この問題をたんなる民族差別事件としてだけではなく、日本帝国主義の成立過程の一部として位置づけようとするものである。

1

第五回内国勸業博覧会

内国勸業博覧会は政府主催の、当時では最大の博覧会であった。明治維新以降の富国強兵・殖産興業政策のなかで、戦略的に重要な位置を占めるものであった。また一八五一年にロンドンで開かれた第一回万国博覧会以来の、世界的な潮流にも加わろうとするものであったが、当時の日

本には国際的な博覧会を開催する力量もなく、あくまでも「内国」と限定された。第三回までは東京で、第四回は平安建都千百年を記念して京都で、最後の第五回が大阪で開催されている。

政府農商務省が所管したのは農業館、林業館、水産館、動物館、工業館、通運館、機械館、教育館、美術館、参考館、

台湾館で、第二会場の堺大浜には水族館が設けられた。日清戦争後の初の内国勸業博として、植民地展示としての台湾館が登場し、参考館には将来の国際博をめざして一八ヶ国・地域から出品された。学術人類館は民間企画として博覧会協賛会の補助を受け、会場正門のすぐ外側で、三月一日に開館した。

陳列されたのはアイヌ七名、琉球人二名のほか、朝鮮人、台湾原住民、インド人、マレー人、ジャワ人などである。中国人も予定されていたが、中国からの抗議によって当初から中止され、朝鮮人・琉球人も途中で陳列からはずされた。

企画したのはこの博覧会委員であり、西田金庫衡器製造所の経営者である大阪の西田正俊である。西田に全面的に協力して展示準備の中心となったのは東京帝国大学理科大教授の坪井正五郎である。坪井は日本における人類学の開拓者で、人類学会を創立、日本列島の先住民をアイヌ神話にあるコロボツクルであると主張して話題を呼んだ人類学の権威である。

坪井は、文部省からイギリス留学に派遣されているあいだに一八八九年のパリ万博の人類館を見て、人類学にとっての重要性を感じていた。彼は大阪に東京帝大の研究員を派遣し、所蔵する植民地諸地方の収集品の展示にあたらせた。

坪井らの学会誌『東京人類学会雑誌』第二〇三号（一九

〇三年二月二〇日号）には、「人類館開設趣意書」が紹介されている。

第五回内国勸業博覧会の余興として各国異種の人類を招聘聚集して其生息の階級、程度、人情、風俗、等各有の状体を示すは人類生息に付学術上、商業上、工業上の参考に於て最も有要なるものにして博覧会に欠く可らざる設備なる可し然して文明各国の博覧会を鑒察するに人類館の設備あらざるはなし之れ至当の事と信ず然るに今回の博覧会は万国大博覧会之準備会とも称す可き我国未曾有の博覧会なるにも拘らず公私共に人類館の設備を欠くは吾輩等の甚た遺憾とする所なり爰に於て有志の者相謀り内地に最近の異種人即ち北海道アイヌ、台湾の生蕃、琉球、朝鮮、支那、印度、爪哇^{ジャバ}、等の七種の土人を傭聘し其の最も固有なる生息の階級、程度、人情、風俗、等を示すことを目的とし各国の異なる住居所の摸形、装束、器具、動作、遊芸、人類、等を観覽せしむる所以なり

明治三十六年一月十四日

まず、開会直前まで「学術」の文字はなく、「人類館」と名乗っていた。「人類生息」というのは現代用語の感覚から見ると、何とも差別的である。「文明各国の博覧会」に人類館が設営されているというのも事実である。一八五一年ロンドン万博では世界に誇る最新鋭機械とともに、世界各地のイギリス植民地の物品が展示されて、宗主国国民の観覧者の優越感を満足させた。五五年のパリ万博では帝国主

義各国がこぞって植民地展示を行ない、その後の万博でも拡大していくが、八九年のパリ万博ではついにアジア・アフリカの生身の人間が集落を再現してそのなかで生活を展示されることになる。

フランスではそれ以前に「未開人」の展示は始まっていた。パリ・コミューンで経営危機に陥った動植物園ジャルダン・ダクリマタシオンでは七七年に世界各地の先住民を人類学的教材として展示し、入場者は急増したという。この手法は、九三年のシカゴ万博以降も続けられる（吉見俊哉「ジャポニスム・帝国主義・万国博覧会」、『文藝』一九九二年第四号）。

第五回内国勸業博覧会の人類館企画は、その延長線上にあった。恐るべきは、主催者の政府農商務省企画のなかに植民地展示としての台湾館があったが「植民地人」展示はなかったために、「公私共に人類館の設備を欠くは吾輩等の甚だ遺憾とする所なり」と、民間企業人のなかから人類館企画が発想されたことである。

2

中国・朝鮮からの抗議

博覧会の開会を前に、この企画を知って抗議を始めたのは中国からの留学生たちである。二月一〇日頃には新聞報

道によって人類館企画が一般に知られるようになり、留学生たちは清国留学生会館幹事会を開いて精力的な反対運動を始めた。三名の中国人の展示が予定されており、それは阿片を吸引している風景や、纏足の女性であった。留学生たちは関西在住華僑商人たちに訴えて華僑有志が博覧会事務局と交渉し、また公使館などを通じて外務省にも抗議した。

日本政府外務省は博覧会事務局に照会、そこから民間企画を管轄する大阪府知事に移牒されて、三月初め、大阪府は中国人の展示を止めさせることを決定した。日本政府は中国にむけて四一三〇通の招待状を送付しており、日清戦争後の関係回復に努めていた折柄、外交問題になるのは避けたかったはずである。ここで取りあげたいのは、留学生たちの差別批判の論理である。

嗚呼支那人！ 嗚呼支那人！！ 吾さきに其地位を知らずして今より知るようになる。（中略）人類学を講ずる者あり、人類館を博覧会の門に設ける。其間に支那、朝鮮、琉球、印度、蝦夷、台湾生蕃、爪哇等七種の民を參養し、其頑風惡習を演じせしめ、以て参会者の観覧となす。（中略）観るに日本各地に動物水産各館を遍く設け、今又人類館の設有り。これ明らかに動物水産を以て我を目するなり。

留学生たちの雑誌『浙江潮』に掲載されたものだが、こ

れを引用した呂順長は同誌の同じ号に載ったと思われる文章の要旨も紹介している。(「大阪人類館事件における中国側の対応について」、『人類館 封印された扉』所収―後述)。

中国人留学生たちに言わせれば、印度と琉球は滅びた国で、イギリスと日本の奴隷に過ぎない。朝鮮は我が旧蕃属であるが、ロシアと日本の保護国になっている。ジャワ、アイヌ、台湾の生蕃は世界の最も卑しい人種で鹿や豚に近い。しかし、中国はたとえいま国勢が衰えていても、どうしてこの六種族と同列に扱われなければならないか。

あの連中は差別されても、自分たちは一緒にされるべきではないという論理である。呂順長もその差別性を指摘している。結果的に中国人を除外して人類館は開館したが、その後、中国服を着て纏足をしている女性が展示されていることが判明した。湖南人だとも噂され、留学生たちは激昂したが、公使館は動かず、人類館側は台湾人だという。留学生たちは直接本人に会って確認した。その女性は日本語は話せるが北京語や湖南方言は理解できない。漢民族の台湾人だと判明し、人類館側からの回答書も得て、留学生側も納得した。このような形で解決したのは、中国側にすでに日清戦争後の下関条約で台湾は日本に割譲してしまっただからだとの諦めがあったからかもしれない。

下関条約によって自分たちの意志に無関係に日本に売り

飛ばされた台湾は、アジアで初めての共和国である台湾民主国を建国し、多数の義勇兵を含む台湾民軍を創設し、半年近く日本軍との戦争を展開したあとも、ゲリラ戦を継続していた。この博覧会で中国政府が台湾館の開設はもちろん、人類館での台湾人の展示を容認したことは、台湾漢族側としては後に成立する「中国はひとつ」というような一民族一国家の原則を受け入れがたくすることになる。

中国側からの抗議によって、人類館は中国人を展示計画からはずすとともに、名称を「学術人類館」と変更した。学術のためならなんでも許されるはずだという、アカデミズムの傲慢を示している。

三月一〇日の開館後まもなく、朝鮮人有志が大府警務部に、また韓国公使が日本外務省に、朝鮮人の展示に抗議し、三月末、朝鮮女性二名は「撤去」されている。

3

沖縄からの反発

沖縄から抗議の声が起こったのは四月になってからである。このころ人類館に展示されていたのは、資料によって人数が異なるが、アイヌ七名、琉球人二名、台湾人二名、台湾原住民三名、マレー人二名、ジャワ人一名、インド人七名、トルコ人一名、ザンジバル島人一名などである。計二

八名とする資料もある。

『琉球新報』主筆の太田朝敷はすでに二月からこの博覧会に注目しており、沖繩から芸妓が派遣されて手踊りを披露することを批判していた。

本県の人が博覧会を機として大阪に打ち出て世界の人々に琉球固有の手踊りを観せんと企てたことは兼々聞及ぶことなるが、此事に関しては我輩は元来余り好まぬ事にて手踊に限らず芝居でも給仕人を出すことでも日本にて普通ならぬ風俗を晴々しく持出すことは成るべく止めて貰ひ度く思ひ居るなりそは別儀にあらず本県が兎角全国と調和し兼ねるは全国人士の頭に風俗人情が全く異れると云ふ觀念が刻みこまれ居るにあり本県の風俗人情が果して根底より大和民族と差別せらるべきや否やに就てはこの短き雜報に於て説明し得べき事ならねど我輩は本県の人情が他府県と多少の相違あるは只程度の問題にして（中略）博覧会の如き晴場に持出して一寸と目先の異なりたる風俗を示すに至りては最も多数なる浅識の觀者の眼に映ずるはたゞ異様と云ふに外ならず即ち我沖繩は元来大和民族以外の民族と云ふ觀念を確めしむるに過ぎざるべし左れば本県の大方針たる全国との調和を害するの恐れあり……（大阪博覧会と琉球手踊」、『琉球新報』二月二五日）

太田朝敷の差別と同化についての考え方は後述するが、何事も他府県なみにすることによって差別から抜け出そう

というのである。そのためには固有の芸能も隠すべきものであった。同じ日の『琉球新報』雜報で「廃業娼妓大坂へ行く」では、「琉球貴婦人」として展示されることになる二人の元娼妓が「手踊其の他の芸を演し一獲千金と云ふ積りで」出発したが、「見世物的に陳列されては県下の為実に面白くないことである」と短く報じている。

当事者の二人も、沖繩物産の陳列の前で客の目を引くために店頭立つ、給金は一日一円、前金二〇〇円、博覧会見物も大阪見物もできるし、宴会で接待をすれば花代も貰えるという約束で大阪へ来たが、宿にさえ泊まれば夜は板間小屋に監禁されていると、泣いて訴えたという。

実態を知った『琉球新報』では、太田朝敷が大阪からの情報を「同胞に対する侮辱（人類館）」と題して伝えた。要旨は次の通りである。

今回の博覧会でわれわれ沖繩人が実に憤慨に堪へないのは人類館に沖繩の婦人を陳列したことである。家屋といえれば立派だが茅葺の小屋で、かろうじて畳は敷いてあるが、最初は藁に座らせようとしたが本人が不服を唱えたので畳にした。これから推量しても設立者の意図は野蛮風に見せることにあるのは明白だ。陳列されているのはまごうかたなき娼妓で、持っているのは高麗煙管とコバの葉の団扇である。「されば縦覧者の目に映ずる沖繩は同列のアイヌ生蕃と大差これなく候」

もつとも癪にさわるのは説明者の口上で、鞭で指して「此奴は云々」というのが軽蔑の口調で、虎や猿の見世物と変わらな
い。中国女性の陳列は公使の異議によって中止し、朝鮮女性に
ついても撤回運動が行なわれている。外国に対して侮辱なら
ば、同胞に対しても侮辱ではないか。(四月七日)

同じ日の『琉球新報』には在大阪沖繩人からの寄稿もある。
見世物にされていることに怒り、本当に人類学研究なら
らば、ヨーロッパ人も中国人も、天保(生まれの)チョン髷
親爺も齒を染めて眉を剃った女性も、すべての人種を陳列
すべきだ、北は北海道から南は琉球、台湾まで、同じ神州
の同胞ではないかと述べている。

太田朝敷は、四月一日付けの『琉球新報』で「人類館
を中止せしめよ」と叫んだ。しかしここで、すでに表われ
ていた差別の論理が明確に押し出される。

他府県における異様の風俗を展陳せずして特に台湾の生蕃北
海のアイヌ等と共に本県人を撰みたるは是れ我を生蕃アイヌ視し
たるものなり我に対するの侮辱豈これより大なるものあらんや。

『琉球新報』はキャンペーンを続けた。「我か同胞の敵」
(四月二七日)、「我か同胞の救助に尽力せよ」(四月二九日
付)など。展示された女性たちも「悪漢の詐欺手段にかゝ
りたることを憤り小屋に引きこもりて観客に接せず館主も
大に持てあまし居る」と、ストライキに入ったようである。

在阪中の沖繩商人たちも解決に努力したようで、雇った時
の仲介者が西田正俊に電報を打ち、四月三〇日、「撤去」が
決まり、やがて二人は沖繩に帰郷した。

しかし『琉球新報』の批判は、「台湾の生蕃や北海道のア
イヌと同列に」とか、「野蛮人種の見世物小屋」というよう
に、自分たちと野蛮人を同じに扱うなという論理で一貫し
ており、また「同じ神州の同胞」、すなわち天皇の赤子とし
て平等であるという天皇制イデオロギーの浸透も見られ
た。儒教国家、守礼の邦である琉球王国の支配階級の流れ
をくむ人々にとっては、自然な反応ではあるだろう。だが
それは、他者を差別することによって差別構造の階段を少
しでもよじのぼろうとする営みだったのである。

なお、人類館に展示されたアイヌの人々の対応は異なっ
ていた。『大阪毎日新聞』(三月六日)「アイヌ土人の気焰」
は日本名伏根安太郎、本名ホテネのことばを次のように伝
える。

北海道にて土人を内地人と共に小学校に入らしむれば兎角ア
イヌだとか馬鹿だとか罵り散らされ教育上不利なる結果を見る
ものから単純に土人のみの尋常小学校程度の者を設けこれを卒
業せしめたる上は自ら更に進んで教育を受けんとする欲望も生
ずべきにつき何とか土人学校を設けんとて種々苦心の末妻女の
衣類までも売払いて四五円許ばかりの資を投じ郷里帯広市外に小さき

ながら一個の校舎を建て……。

一八九九年に制定された北海道旧土人保護法は、国費で土人学校を設置することを定めていた。カリキュラムは和人むけの小学校にくらべて簡略なものであった。その土人学校もわずかし建設されず、ホテネは私財を投じて私立の伏古旧土人学校を開設していた。ホテネは人類館で学校の設立・維持費のカンパを訴える演説を続けていた。ただ『大阪毎日新聞』への投書では、カンパするのは学校生徒ばかりで「紳士」の名はカンパ名簿に一人もいないという(四月一日)。

右の引用記事のように、ホテネ自身が「土人」ということばをどの程度使ったかはわからない。内容も記者の解釈が入っているよう。「土人」は明治期を通じて、新聞紙上でアイヌ・琉球人を指すことばとして一般的に使われており、一九九七年に北海道旧土人保護法が廃止されてからも「旧土人」は行政用語として生き続けている。

ホテネはみずから展示されながらも、道頓堀の芝居小屋でアイヌ八名が見世物になっていたのを救出し、帰郷させている。彼はクリスチャンで、大阪でも日曜日にはフロックコートで教会に通っていた。救出には宗教家などの協力も得たようである。このことは、ホテネが「見られる」立場を主体的に利用していたことを示している。

4

太田朝敷の同化論

沖繩における人類館批判キャンペーンの先頭に立った太田朝敷の論理はいかなるものであったのか。彼は一八六五年(同治四年、当時琉球では中国年号を使用している)筆者注)、首里山川に土族の次男として誕生、叔父夫婦の養子となり、一八八二年、沖繩県師範学校速成科を卒業、初等科予科に入学した。琉球王国は一八七九年に日本によって最終的に滅ぼされ、直ちに設置された日本語学校である会話伝習所が、翌年沖繩県師範学校となった。皇民化政策を進める人材を養成する、同化政策の尖兵としての機関である。八二年一〇月、太田は謝花昇らとともに第一回県費留学生の辞令を受け、一二月、明治天皇に拝謁、翌年一月、学習院に入学した。

当時沖繩では、親日の開化党と、清国を背景に独立を回復しようとする頑固党の対立が激しかったが、入学のころ、東京に強制移住させられていた旧国王の尚家を訪れて、清国との絶縁を勧告しており、基本的な政治的・思想的立場は決定していたようである。八六年、慶応義塾へ編入学、九三年ころ帰郷、九三年九月に琉球新報社設立に参加した。日清戦争の結果、清国を背景とする琉球王国回復運動は終焉を迎える。九五年六月ころ、沖繩の人心を統一

するために尚家をかついで公同会を創立、そのころ『琉球新報』の主筆となった。またこの時期は、先島の人々が琉球王国以来の沖繩からの収奪から脱出するために旧慣温存政策の廃止、内地並みの法制を要求し始めている。

一九〇〇年には『琉球新報』で「置県以来我沖繩の文明の為め種々の事業を設計して比較的多くの功を奏したのは県庁にあらざや」と、奈良原繁知事を支持し、自由民権派を批判している。奈良原知事は薩摩出身で、「琉球王」と呼ばれ、専制的な権力をふるっていた。太田は奈良原と親交を深めると同時に、内地からの沖繩差別に強く反発した。

琉球人愈々最後の大決心をなすべき時が来た何時迄もコー安閑として最も悪心なる二三者等の為めに奴隷視せられ殖民地視せられて居つた日には未来永劫頭を持ち上ぐる時がないのである（中略）畢竟は鹿児島商人の或者は我が琉球の山川悉く其殖民地と心得て居るのである而して此の愛々たる琉球土著人民を以て其の奴隷の如く視なして居る丁度昔時の欧羅巴人種が亜米利加の印甸人に対するが如くまた彼の未開野蛮の阿弗利加土人に対するが如く然るものがあるのである（「憐なる琉球人」『琉球新報』一九〇六年八月一日）

鹿児島商人のように一部の者が、まるでヨーロッパ人がアメリカインディアンやアフリカ人を見るように差別し、琉球を植民地と見なしていると弾劾している。差別するの

は、実は一部の者だけではない。「内地人の中には、本県内地の差別観を否認するものあれども、之を否認する当人さへ、深く自家の脳裡を点検するときは、必ず窃かに赤面することあるべし」と、自分は差別しないという者であつても実は差別しているだろうと指摘する（「与K、S論時事」『琉球新報』一九〇二年六月九日）。

このような差別から脱出するためにはどうすればよいか。太田朝敷の最も有名な「クシヤメ論」である。太田は一九〇〇年七月一日に開校した沖繩高等女学校の開校式で演説した。主旨は女子教育が重要だということである。文明の光は家庭から発する、家庭の主宰者は女子であるから、純良の婦人を作らなければならない、沖繩の女子就学率はあまりにも低いと述べた。そこで例の一節が出る。

沖繩今日の急務は何であるかと云へば、一から十まで他府県に似せる事であります。極端にいへば、噓くしゃみすることまで他府県の通りにすると云ふ事であります。全国の百分の一位しかない地方でありますから、それ位な勢力では、到底従来の風習を維持していくことは出来ない。維持が出来ない者とせば、我から進で同化するか、又は自然の勢ひに任すか、取るべき道は此二ツであります、即ち積極にやるか、消極にやるかの二ツでございます。（「女子教育と沖繩県」『琉球教育』一九〇〇年一〇月）

内地の人々はどのようにクシヤミをするのであろうか。

有名なのはニワトリの鳴き声である。ニワトリはどう鳴いていると表現するかの全国調査が行なわれ、その結果政府は「コケッココー」と表現すると決定した。しかし「コケッココー」と聞いていた地方は存在しなかったのである。しかしそれ以来、日本人は、ニワトリは「コケッココー」と鳴くと思ひ込んでしまった。人間のクシャミも同類であろう。太田が言っているのは、クシャミも日本政府が決めたようにやれということになる。政府による感性の統制、均質化である。太田の「新沖繩の建設」（『琉球新報』一九〇一年三月〜五月）は、そのような主張の集大成である。

言語は国民の感情を融和する最要の具なり。本県に於て内地人本県人の区別に於て常に障壁を築きたるが如き感あらしむるは地理上歴史上其他風俗人情の上より種々の原因あるべきなれども言語の相違其重なる原因なるを疑はず（中略）新沖繩の言語は小学校の教科書中の言語を土台とし醇粹なる普通語に化せしむるの覚悟なかるべからざるなり而して其普及の方法は苟も普通語を解し得るものは勉めて之を以て用を弁じ談話をなし止を得ざる場合の外は本県語を使用せざる様注意せざるべからざるなり。

皇民化政策の中軸は日本語教育にある。当時はまだ「標準語」という単語が普及しておらず、「普通語」と呼ばれていた。これから後も方言札が猛威を振るうことになる。太田は趣味や嗜好も内地に合わせろという。

置県以来は上下を通して嗜好野鄙となり随て人間の品位までも下落したるの有様に陥入り本県の樂事と云ひ人民の嗜好と云ひ別に本県特種のものとはこれなく高尚になればなるほど内地流になり自然の結果として全国と一致するに至るは必然の勢ひなれば娯樂的趣味的の事物は大に輸入して之を高尚の域に導くは社会改良上実には有要の事項なりとす。

『太田朝敷選集』全三卷（第一書房、一九九三〜一九九六年）を伊佐眞一とともに編集した比屋根照夫は、『近代沖繩の精神史』（社会評論社、一九九六年）をまとめ、新しい太田朝敷像を描き出そうとした。比屋根は太田朝敷の主張を「下からの『同化』論」として、「単色な同化論、あるいは一元的な同化論ではなく、より本質的には、沖繩の現実に即した太田なりの『社会的勢力』の結集の方法、戦略としての意味がこめられていた」とする。

太田が初めて「クシャメ」論を述べた「女子教育と沖繩県」は、女子教育、家庭教育こそが文明への道であるとした。比屋根はそこを重視して、「太田は自らもふくめ沖繩主体そのものに対し『文明』化⇨同化への自主的、主体的な選択（意志）を問うているのである」とする。

重要なことは、朝敷が「内地」化、「同化」を論ずる際に、主に社交、家族の体制、日本語の習得、衣服の改善などの外見的な改善を中身としていることである。いわば、外見的な「近代化」、「内

地」化を達成することで、沖縄の地位の向上をはかり、「沖縄県民勢力発展主義」を実現しようとの構想であった。そこにはいかなる意味でも、自己卑下や他者への従属という意識はない。

例にあげられている改善は、外見的なものにすぎないのであるか。家族のありかたや言語はきわめて内面的なものであり、また外面的なものであっても、それは内面を侵食する。太田の姿勢は確かに対等を求めるものであり、従属の意識はないとわたしも考えるが、はたして沖縄の生活文化について自己卑下がないといえるだろうか。趣味が「高尚になればなるほど内地流に」なるというのは自己卑下ではないのか。琉球手踊りを内地人が異様と見るのは「浅識」であるからとするのは、卑下ではないようにも思えるが、それではなぜ隠さなければならないのか。

比屋根は太田朝敷が沖縄の歴史文化の尊重を主張し、県政による歴史的記憶の湮滅政策を論難していることを紹介している。太田の文章にはもちろん沖縄への愛情が各所に表われている。比屋根は太田の思想を次のようにまとめる。

朝敷の言論活動は一方に外見的、外形的な“近代化”、“内地”化、“同化”を柱とし、他方に内発的な“近代化”、“異化”、“沖縄の独自性の尊重などを柱とし、この二つの均衡の上に成り立っていた。

しかしわたしにはまだ、「内発的な”近代化”、異化”を

太田から読み取ることとはできていない。比屋根は一九九七年六月二三日、NHKのETV特集「沖縄の中の日本 言論人太田朝敷」に出演した。姜尚中との対談である。非常に興味深い内容なのだが、一度見ただけでは理解するのは難しい。わたしは授業との関係で一〇回ほども見直している、やはり疑問に思うのは、植民地人が同化に向かう契機は文明の普遍性への志向であるということと二人が一致しており、それが太田朝敷の高い評価につながっているのだが、その場合の「文明の普遍性」とは、宗主国が示す「普遍性」ではないのかという点である。

太田朝敷が人類館事件において差別に依拠して反差別論を展開したことについて、比屋根は「『沖縄県民勢力発展主義』が内包する屈折した少数民族への排他性、優越性の意識の発露を見ざるをえない。抑圧され、差別された沖縄県民の位置・勢力の発展を痛切に希求する太田の言論活動が、少数民族との連帯とはならず、逆にそれらを排除して行く所に近代沖縄の重荷を背負った太田の悲劇的な構図がある」とする。しかしこれでは、太田朝敷の反差別論の差別性を、彼の思想のなかに組み入れて理解したことにはならない。わたしはその原因を、太田がめざした「文明の普遍性」が日本によって提示されたものだからではないかと考える。

「二等国」Ⅱ差別国家への道

ようやく主題に到達した。これまで人類館事件は、周辺諸民族、特に沖繩への日本の差別という文脈で語られてきた。あるいは沖繩の側の反差別論の差別性も指摘されてきた。しかしもつと重大で、かつ簡単なことが軽んじられてきたのではないかという思いがある。中国人留学生と太田朝敷に共通している、なぜあんな連中と一緒にされなければならぬのかという論理は、差別の重層構造の階段を、一段でも上にあがることによつて少しでも被差別の痛みを軽減したいという感覚であろう。そこには差別する側に回りたいという欲求はないことを願うが、はたして日本はどうか。

日本は日清戦争で台湾を植民地化し、第五回の内国勸業博覧会で初めて台湾館という植民地館を政府が設営した。これは西洋帝国主義を真似たものだが、人類館までは模倣しなかった。しかしあろうことに民間から人類館企画が出され、アカデミズムが全面的に協力した。中国、韓国、沖繩から批判が集まり、『琉球新報』は「人類館を中止せしめよ」と叫んだが、人類館は最後まで続けられた。

一九〇七年、東京府主催の東京勸業博覧会ではアイヌが、一九一二年、北海道出品協会主催の明治記念博覧会（東京）ではアイヌ、ギリヤーク、オロツコ、台湾原住民が

展示され、いずれも坪井正五郎が関係した。一九一三年、大阪商工会主催の明治記念拓殖博覧会でもアイヌ、ギリヤーク、オロツコ、台湾原住民が展示された（長谷川由希「アイヌ民族と植民地展示」、前掲『人類館 封印された扉』所収）。生身の人間の展示はこうして続いていった。

日本帝国主義の成立は二〇世紀初頭である。日露戦争によつて日本は世界の一等国となった。第一次世界大戦とロシア革命で、五大国に数えられるにいたった。生身の人間展示は、まさにその時期に実施された。周囲の他者を差別することで差別の階段を少しでもあがりたいたい、差別する側に回りたい、なりあがりたいたいという欲求は、日本こそが色濃く持っていたという簡単な事実を直視したい。差別によつて大日本帝国は完成した。

人類館事件から二〇年あまり。沖繩をめぐるふたつの重要な論争があった。「さまよえる琉球人」と「滅びゆく琉球女の手記」をめぐるものである。

広津和郎が『中央公論』一九二六年三月号に発表した「さまよえる琉球人」について、在日沖繩人労働者が組織する沖繩青年同盟が抗議し、その抗議文と回答書を広津和郎が同誌五月号に公表した。内容に触れる紙幅はないが、差別とは何か、差別者が差別を考えるということはどういうことかについて、すでに一九二六年にこの地平まで到達

していたことは歴史的な財産である。

首里出身の久志富佐子が『婦人公論』一九三二年六月号に「滅びゆく琉球女の手記」第一回を発表した。沖縄出身であることを隠して東京で裕福になつてゐる叔父を描こうとしたものである。その直後、沖縄県学生会会長と前会長が久志富佐子に抗議を申し入れた。それについての釈明文が『婦人公論』に掲載されている。

お二方の主意は、こう故郷のことを洗いざらい書き立てられては、はなはだ迷惑の至りだから黙つてゐる。またあの中に出てくる一人物（叔父と称せられた者）のためには、皆がそうだと誤解されがちだから、謝罪しろとの申し出でありましたが、この点、妾はなにも嘘八百を並べたわけではなし、また、沖縄県民全部が、出世すると、あの人物のようになります、と書いた覚えもありませんから、どうもお気に召すような謝罪の言葉がみつからないのを、残念に存じます。学生代表のお話ではあの文に使用した民族という語にひどく神経を尖らしていられた様子で、アイヌや朝鮮人と同一視されては迷惑することでしたが今の時代に、アイヌ人種だの、朝鮮人だの、大和民族だのとわざわざ段階を築いて、その何番目かの上位に陣どつて、優越を感じようとするご意見には、どうしても、私は同感する事ができません。（中略）代表の方々は、我々を差別待遇して侮辱するものだといきまいておられたが、その語はそっくりそのまま、アイ

ヌや朝鮮の方々に人種差別をつけるようなものではないかと思われます。（後略）

沖縄県学生会の代表たちは他者を差別することによつて差別の階段をあがろうとするがゆえに差別を認識できない。一方で東京では沖縄県人有志が久志富佐子の激励会を開いたという。人類館事件から二九年、沖縄では久志富佐子のような発想をする人々の集団が形成されていたのである。

一九七六年、知念正真作「人類館」が発表され、岸田戯曲賞を受賞した。沖縄の演劇集団「創造」によつて上演され、好評を博した。二〇〇三年、関西沖縄文庫に集う人々が人類館事件を問い直す取り組みを始め、一二月、リバイバルおおさかで「人類館」再演が実現した。その過程は沖縄テレビによつてドキュメンタリー「よみがえる人類館」として全国放送された。また、演劇「人類館」上演を実現させた会「がまとめた『人類館 封印された扉』（アットワークス、二〇〇五年）には、本稿を執筆する際に大きな刺戟を受けた。しかし現在の沖縄ブームは人類館と同じではないのかという問いかけに本稿は答えられていない。

ちもと・ひでき

一九四九年生まれ。筑波大学人文社会科学部研究科教授。著書に、「日本における人民戦線史観の批判的研究―オルタナティブな運動の模索―」（社会評論社、近刊）など多数。